The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	菊池寛とバルザック : 『真珠夫人』をめぐって
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

菊池寛とバルザック
――『真珠夫人』をめぐって――[1)]

柏木　隆雄

1. 処女作が語るもの

菊池寛の短編『身投げ救助業』（1916年）は、近くの川に身投げする人間を物干し竿で救い、報奨金を貰う茶店の老婆を主人公とする。老婆は一人娘に家出されて、今度は自分が自殺を図るが中年男に助けられる。助ける身と助けられる身の相違。老婆は以後「身投げ救助業」をやめ、ひっそりと暮らすという話である。

処女作は作家のすべてを示す、という。29歳の菊池寛が本名で発表した最初の小説のひとつ『身投げ救助業』は、彼の文学を形作る要素を、ほとんどすべて含むと言って良い。

第一に、その簡潔、恬淡な文章。きわめて明快で論理的、余計な熱を込めず、情緒的要素をできる限り捨てて、作家の目に入ったままを真率に描いたかに見える文体。たとえば冒頭近くの数行を引いてみよう。

> 自殺をするに最も簡便な方法は先づ身を投げることであるらしい。之は統計学者の自殺者発表を見ないでも、少し自殺と云ふことを真面目に考へた者には気の付くことである。所が京都には良い身投げ場所がなかつた。無論鴨川では死ねない。深い所（くぴ）でも三尺くらいしかない。だからお俊伝兵衛は鳥辺山で死んで居る。大抵は縊（くぴ）れて死ぬ。汽車に轢かれるなとと云ふ事も無論なかつた[2)]。

これはある意味で森鴎外の文体に近い。しかし鴎外ほど突き放した書きようではない。そこに鴎外後期の文体を経た菊池寛独自の文体の創造がある。おそらくは自家の漢学者、儒学者の伝統を引き継ぎながら、柔らかい感性がこっそりと盛り込まれている。菊池寛はこの文体をわがものとして、次々と短編を創作して行った。読者は明快なテーマが明快な文章に盛られていることを喜び、その文体の余波が、新聞小説家としての菊池寛を大成させたのだろう。新聞小説の読者は難解、晦渋でスピードの遅い文体を嫌う。彼の小説家としての成功は、まずその文章に拠るところが大きい。したがって連載が終わって単行本となり、それが読み返されると、長編の場合は、その明快さが単純さに変わる。今日、彼の長編小説が多くの支持を受けていないのも、そこに原因の一つがあるのかもしれない。

『身投げ救助業』が示す特徴の第二は自伝的要素である。友人佐野文雄のマント質入れの責を自ら負って一高を去り、京都帝大英文科選科生となった菊池は、26

1）この稿は2014年2月13日高松市リーガホテルゼスタ高松における一般社団法人四国・電気管工事業協会主催「平成25年度講演会」で「菊池寛の文学―作品を貫くもの―」と題しての講演原稿に加筆したものである。

2）菊池寛『身投げ救助業』、『日本現代文学全集』第57巻、講談社、1967年、7頁。

歳から29歳まで3年間京都で過ごした。『身投げ救助業』が東京帝大の文科生を中心とする同人雑誌第4次『新思潮』に掲載されたのは1916年9月。京都帝大卒業は同年7月で、彼は京都から参加した。東京を拠点とした『新思潮』の中で、当時完成して間もない京都疎水の光景、そこが新たに自殺の名所となる経緯の細かい描写によって、京都にいる菊池が東京の『新思潮』に参加している事実が強く印象づけられる。そして一見ありそうもない「身投げ救助業」も、京都の彼がじっさいに見た「本当らしい」話として読者に受け取られる。

特徴の第三は、恩を施す話とその恩にどう報いるか、という菊池の生涯にわたるテーマがすでに現われていることだ。川に飛び込んで死のうとする人間に、老婆は長い物差し竿を差し出して救う。当然その自殺願望者に感謝されるべきと考え、お上からも報奨金が出るのだから、善行というべきだろう。しかし自殺失敗者は彼女に礼の一言も言わない。ところが当の老婆が身の行く末に絶望して自殺しようとした時、同じ形で救助され、彼女はそのことをかえって恨むことになる。自分の身投げ救助の行為の本当の意味が彼女の身にしみた、とは本文中には書かれていない。老婆の気持ちは何ひとつ書かれずに、こう締めくくられる。

> 老婆はそれ以来淋しく、力無く暮らして居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は帰りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が続いて行く。
>
> 老婆の家の背戸には、まだあの長い物干竿が立てかけてある。然しあの橋から飛び込む自殺者が助かつた噂はもう聞かなくなつた[3)]。

老婆の気持ちは「泥のやうに重苦しい日」という言葉でみごとに表されている。それは幼少時代から多くの人の世話になり、時には恩返しをあからさまに期待されて学費を給された経験や、ひたすら温情を親友の家族から与えられながら、それに報いることができず、なお他人の厚情にすがらねばならぬ寛自身の、長く鬱積した感情でもあっただろう。

2.「恩」を眺める「普通の目」

恩を着た者の気持ち、恩を施した者それぞれの「泥のやうな重苦しさ」は、以後さまざまな形で菊池寛の小説に登場する。たとえば、そのタイトルもそのものズバリの『恩を返す話』。島原の乱を題材にしたもので、腕自慢の侍甚兵衛が、一揆の剛の者に斬り立てられ、ついに昏倒するところを、日頃ライバルと意識する若武者惣八郎に危急を救われる。以後甚兵衛はそれが気になってたまらない。一方の惣八郎は一向に意に介さぬ風。恩返しの機会をとらえ損ねた甚兵衛は、その呪縛から逃れぬまま無為に死ぬ。菊池が在学中から深い恩を受けた成瀬夫人（注4参照）の思い出を語る『大嶋ができる話』（1918年6月）も、「恩」に対する菊池寛の屈折した思いが詰め込まれている。

そればかりではない。彼の作品中、生彩もあり、評価も高い敵討もののシリーズも、受けた恩を『身投げ救助業』の老婆のように、仇と思う考え方からすればその本質は同じということもできよう。恩を返す、仇を討つ、いずれもその底に

3）菊池寛『身投げ救助業』、前掲書、10頁。

流れるのは、菊池寛が幼い時から味わい、さらに成人して結婚するまで、ずっと人の恩にすがってきた複雑な思いが横たわっている。恩を受けたことは涙を流すほどに有難い。しかしその恩をなかなか返すことができない。そしてまた恩を受けたことに対して、やすやすと恩に報じては、かえってその好意に背くことではないか。菊池寛は本質的にきわめて優しい人であり、また同時に「利己主義者」ならぬ「自己たることを尊重する人」であった。仇討ちで、敵となった人間、敵を討つ人間双方に彼が深い同情を抱くのも、若い時からの人生が大きく影響しているように思われる[4)]。

『身投げ救助業』が示す菊池文学の特徴の第四は、「普通の人間のまなざし」だ。「恩」と「仇」に対する彼の姿勢からも了解されるが、身投げを助ける、という普通の人情から、報償を得ることによって、「生業（なりわい）」とするほどに熱心となる。それはある意味で人間として普通の行動パタンで、まして他人が捨てようとする命を救うのだから、善行に違いない。第一そのことでお金をまっとうな形で貰えるではないか。しかしわが身になってみると、助けられることが、しかも大勢の野次馬の見守る中で救助されることが、どれほど身も世も有らぬほどにやり切れないものであるか。菊池寛のまなざしは冷たくもなく、熱くもない。確かに冷徹と言えば冷徹、しかしたとえば老婆の自殺する瞬間を、「ずり落ちるやうに身を投げた」[5)]と描く底に、暖かい人情のまなざしがある。

新理知主義の作家として菊池と併称された友人芥川龍之介の作品を思い出そう。芥川が『鼻』で華々しく文壇に躍り出たのは、この1916年2月。『鼻』が『今昔物語』の「池尾禅珍内供鼻語」に基づくように、その前年11月に『帝国文学』に発表した『羅生門』は、同じ『今昔物語』の「羅城門登上層見死人盗人語」に拠る。食い詰めた下人が門の楼上に登ってみると、老婆が羅生門に捨てておかれた女の死骸から、髪の毛を一本一本抜き取っている。下人に咎められた老婆は、死人の髪の毛を抜いて鬘にして売らないでは飢え死にするから、こんな非道もやむなくする、と言う。下人は「では己が引剥ぎをしようと恨むまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ。」と老婆の被服を剥いで去る。

「羅生門」の老婆の描き方は、菊池の『身投げ救助業』におけるそれに、いささか相似する。そして下人の老婆に対する態度も、老婆を川から救助した「色の黒い四十男」に似たところが無いではない。菊池の老婆も、芥川の老婆のように、死体たるべき人間を拾い取って生活の糧にしている。そして色の黒い男は、芥川の下人のように、老婆の食いぶちを老婆から奪う。しかし語り口はずいぶん違うから、その相似に気が付くものは少ない。

芥川はわざわざ『今昔物語』の本文を自分の文章に挿入して、いかにもその話

4）菊池寛生顕彰会編の「菊池寛資料集成」の菊池の一高時代の友人成瀬正一のいとこである野口敦「菊池さんを憶う」に、成瀬家で子どもたちと鬼ごっこをしてよく遊んだ話が詳しく出ているが、それとほとんど同じような文章が『第二の接吻』（1924年、大阪、東京朝日新聞）の主人公礼二が学生時代に世話になっている家での鬼ごっこの遊びの描写にある。ただし主人公は絵にかいたような美男子である。

5）菊池寛『身投げ救助業』、前掲書、10頁。

に拠るところの古典があることを知らしめ、その古典を下敷きにして、新しい近代的な知性を強調した。近代的知性をぎらぎら輝かせたこうした切り口を、『身投げ救助業』に見出すことはない。むしろ普通の人間らしい感慨を読者に呼び起こすように、穏やかに終わっている。この「人間らしい、普通のまなざし」を示すところが、菊池寛の小説全体を貫く特徴の一つと言えよう。

菊池の『身投げ救助業』は、拠り所にした本があるとはまったく思わせず、新時代の新しい商売の紹介のような、皮肉なタイトルで、市井の一エピソードというスタイルが貫かれている。しかし玄人目には、『今昔物語』にある話を現代風に書き直したかのような疑いを起させる。菊池の狙いはそこにあったのかも知れない。芥川は『今昔物語』の話を、時代はそのままに現代風な解釈を施した形で表わした。一方菊池はいかにも『今昔』にでもありそうな話を、さりげなく、普通の目線で、人生の善悪の裏表の相を描いて見せたのだ。

菊池がその文学的生涯にわたって文学作品の中で逸話風の箇所を愛し、それをしばしば自分の小説の中に使っていたことは、彼の周囲の人々の証言からも知ることができる[6)]。今でも多くの読者を得ている敵討ちのさまざまな様相を描いた作品群や武将の生涯の一場面などを描いたものは、寝る前にいつも読みふけったという『名将言行録』や『常山紀談』などから題材を拾った。『藤十郎の恋』は江戸時代の藤十郎の芸談や逸話を集めた『賢外集』にその材源があるが[7)]。藤十郎が芸の工夫のために芝居茶屋の女房に嘘の口説きをする原文は、ごく短い断章にすぎない。そこから藤十郎の江戸から来る役者に対する焦りのような心理と、役者としての自負、幼馴染のお梶を偽る胸苦しさ、といった大きな人間ドラマへと膨らませていく手腕、そこにあるエピソードを読んで、そこからさまざまな想像を膨らませて一編のストーリーを創造するところに、菊池寛の本領がある。

3. 新聞小説『真珠夫人』の成功

彼が初めて新聞連載した『真珠夫人』は、満天下の女性を唸らせ、彼が大阪へ行ったりすると、たちまち人だかりができたという[8)]。あたかも短編『身投げ救助業』が後の菊池寛の文学的営為を象徴するように、『真珠夫人』もまた、その後の彼の長編小説を決定づけた。そこにも菊池の小説の特質がはっきりと見て取れる。すなわち明快、簡潔な文体、見聞きしたモデルの存在、他文学からのアイデアの取りこみ、「恩讐」の狭間の葛藤・・・。

『真珠夫人』は1920年の6月9日から12月22日まで『大阪毎日新聞』に連載、『東京日日新聞』にも同時掲載で、全国の読者に読まれて評判を呼んだ。新聞小説は明治の初めに新聞が出現してから、その読者獲得のための手段として活用され

6）金子勝昭『菊池寛の時代』、たいまつ新書、たいまつ社、1979年1月刊。中西靖忠『菊池寛伝』（改訂版）、菊池寛記念館、1993年3月等参照。
7）日高昭二『菊池寛を読む』、岩波セミナーブックス88、岩波書店、2003年3月、27～29頁。
8）元『文芸春秋』編集長の金子勝昭は、中学生の時、何か性愛的な描写がされているかのごとく、胸をどきどきさせながらそれを盗み読んだ、と書いている（金子勝昭、前掲書、5頁）。しかし現在の読者は菊池寛の一世を風靡した長編小説を読む機会はほとんどあるまい。

たもので、必ずしも菊池寛がその先鞭を付けたわけではない。例えば徳富蘆花の『不如帰』は、1898年から1899年にかけて『国民新聞』に連載されて子女の紅涙を絞り、尾崎紅葉の『金色夜叉』は、『読売新聞』に1897年1月1日から1902年5月11日まで連載、作者の死により未完で終わったが、これも大好評を博した。しかし漱石が『朝日新聞』に入って（1907年）、いわゆる高踏的な小説を連載し、また森鴎外が『渋江抽斉』（1916年）など儒者の伝記小説を発表、さらに自然主義者たちが深刻な小説を新聞に発表するが、抜きんでての大ヒットはない。

それが、『父帰る』や『藤十郎の恋』によって時代の寵児となった菊池寛が、長編小説を書くということで湧いた。『金色夜叉』、『不如帰』で知られる熱海や湯河原といった湘南の海岸を舞台にして始まる冒頭は、それらのベストセラーにあやかる気持ちもあったに違いない。菊池は学生時代世話になっていた成瀬家の別荘のあった逗子近辺に遊びに行った経験もあり、また当時上層階級の避暑地、別荘地として有名になりつつあった湘南は、一般読者には高根の花ながら、憧れを抱かせるに十分な舞台設定だった。

明治時代の新聞小説との大きな違いは、その読者層の変化だ。大正デモクラシイで学制が改革され、旧制の中学、高校が整備されて、「サラリーマン」が登場すると、情報源としての新聞がきわめて重要となり、高等女学校出の家庭の主婦たちも新聞小説の読者となった。『真珠夫人』は新しい読者層を意識した、知性と娯楽性とを兼ね備えた新しいジャンルの新聞小説ということができる。

では読者を熱狂させたという中身はどんなものか。物語は帝大経済を出てサラリーマンになった青年渥美信一郎が、新婚早々肺炎になって養生する妻に一週間ぶりに会うために湯河原へ向かうところから始まる。国府津駅で下車、タクシーの運転手に運賃を安くすると言われて、若い学生と相乗りになり、気も合い話がはずむ。ところが運転を誤まってタクシーが転覆、学生はひっくり返った車の下敷きとなる。青木と名乗る学生は、運よく助かった信一郎にノートと時計を渡し、これを元の持ち主に返してほしいと頼むと、「瑠璃子」と最後に呟いてこと切れる。新聞小説にサスペンスが必要なのは、ウジェーヌ・シューの『パリの秘密』（1842年）以来の常道で[9]、この冒頭のシーンは読者を一気に引き付けるに十分だった。

いったい時計を誰に返すのか、瑠璃子とは？『真珠夫人』はその絶妙な章のタイトルと合わせて、毎回明日はどうなるかと固唾を飲ませる手法を取る。学生が青木男爵の長男で、葬儀の日取りを新聞で知った渥美は、そこで帝大生たちに取り囲まれている荘田瑠璃子という絶世の美女こそ青木の愛した人だと推察し、彼女に時計を返しに行く。時計のことは知らないと言いながら、瑠璃子はかえって家に遊びに来るよう信一郎に言う。一体彼女は何ものか。

9）フランスにおける新聞小説の草分けはバルザックの『老嬢』（1837）だが、従前の語りで必ずしも多くの読者を得ることがなかった。やがてE. シューやA. デュマに倣って、毎回のサスペンスを心がけるようになるものの、シューやデュマの後塵を拝する結果となり、彼らの原稿料の高さを嘆く手紙をハンスカ夫人に書き送ることになる。ついでに言えば菊池の新聞小説のいくつかは、彼が西洋の小説を読んでアイデアを出し、若い作家に代筆させたという。デュマ、シューも一つの工房のように助手を抱えて注文をこなした。

成金の荘田勝平は、貴族政治家を父に持つ瑠璃子と同じ華族の恋人直也が二人してさんざん自分を馬鹿にする会話を耳にして復讐を誓い、瑠璃子の父を罠にはめて娘を我が物とする。しかし瑠璃子に魅入られた彼は、実質的な結婚生活を営めぬまま、ある夜彼女を襲おうとして、彼女を姉と慕う知的障害のある実の息子と争い、心臓麻痺で死んでしまう。莫大な財産を受け継いだ瑠璃子は処女妻のまま、金で恋人を奪われた復讐に、若い男たちを豪邸に集めてサロンを開き、青年たちの心をいたぶって楽しむ。事故で死んだ青木もその一人で、渥美も妻がありながら瑠璃子に引き寄せられていく。瑠璃子とは生さぬ仲の娘美奈子は、義母である瑠璃子に焦がれる青木の弟を恋しているが、彼は結婚を約束する瑠璃子の言葉に釣られて美奈子と三人で出かけた箱根で、自分もまた他の取り巻きの青年同様、彼女に嬲られているに過ぎないと知り、ナイフで彼女を刺す。瑠璃子はそのホテルの支配人となっていたかつての恋人直也に美奈子を託して死んでいく。

あたかも処女作の『身投げ救助業』が後の菊池文学を先触れしていたように、この長編処女小説も、以後の菊池の長編小説を構成するさまざまな要素が組み込まれている。華族ながらも財産を失い、卑屈な生活を余儀なくされる美女。その貧乏に付け入って金に物を言わせて薄倖の美女を虐げる男。その美女に恋しながら財産がないために、あるいは決断ができないために、恋人を不幸にしてしまう男。金や地位があって遊興に耽りながら、結婚となると純情な処女を求める男。男と対等であることを強く意識し、男の上位に立とうとする知性を誇る女性。そうして舞台は必ず家柄あるいは富豪の一種のお家騒動。さらには愛憎の復讐劇。こうしてみると封建的な思想が幅を利かせて、貧富の差が歴然としていた当時、菊池寛の長編小説が読者大衆の夢とカタルシスを叶えて、爆発的に読まれた理由もまた分かってこよう。

4. 冒頭の仕掛け

しかしそれ以上にこの小説をベストセラーにしたのは、いかにも大正後期のモダンな道具立てだ。『身投げ救助業』にできて間もない京都疎水を冒頭に使ったように、『真珠夫人』では、当時は珍しかった自動車を高級リゾート地の湯河原へと走らせて、事故が発生する発端。瀕死の若者が相客に託す謎めいた時計、といったサスペンスの数々[10]。これがたちまちにして新聞の読者を捉えた一大要素であったことは疑いない[11]。

その冒頭の仕掛けは、どこに発想の源があったか？菊池寛が内外の小説を多く

10）「謎めいた死、暗合のようなダイイング・メッセージ、そしてそれを解くことの運命の開示―テクストの冒頭はそうしたさまざまな提示に満ちています」（日高昭二、前掲書、152 頁）

11）さらに『真珠夫人』は柳原白蓮をモデルにしたとよく言われる。いわゆる「白蓮事件」は、この小説連載終了後ながら、おそらく「九州の女王」白蓮の九州でのサロンは当時有名で、様々な若い文化人を集めていたことは、世上のうわさになっており、菊池が所属する毎日新聞の記者もそれに深くかかわっていたから、情報は彼にも伝わっていただろう。白蓮の最初の夫は知的障害があり、妻の陪席者に異常な嫉妬をしめしたことも、荘田の長男の瑠璃子への態度と重なる。まさか白蓮の駆け落ち事件が起こるとは、連載中思ってもみなかっただろうが、それだけ菊池のジャーナリスティックな目が確かだったことを示す。また真珠夫人の人気は、その事件があることによって一層拍車をかけたに違いない。

読んでネタ探しをしたことは、すでに何度も述べてきた。初めての新聞連載にあたって、彼はおそらく既読の西洋小説から面白そうなネタを求めたに違いない。偶然乗り合わせた車で事故が起こって、相客が重大なことづてを頼まれる。これはバルザックの短編小説『ことづて』*Le Message*（1832）の冒頭の場面にそのままではないか。バルザックの短編も、語り手がたまたま馬車に乗り合わせた青年と話が弾んでいる時、馬車が転倒する。以下その部分を引用しよう。

私の不幸な友達は、私のように椅子にしがみつかずに、新しく耕された畑のへりに身を投げた。（略）下手に跳んだか、すべったか、（略）彼は倒れてきた馬車におし潰されてしまった。（略）激しい苦痛みから呻き声を上げる中、彼は心にかかることを一つ、私に託することができた。（略）死の苦しみのさなか、哀れにも彼は、新聞紙で出し抜けに彼の死を知った愛人が感じる悲痛を思いやって苦しみ悩み、私自身が彼女のところへ行って知らせてほしいと頼んだ[12]。

瀕死の青年は愛人からの恋文の束を入れた箱の鍵を語り手に渡すと、手紙を彼女に返す仕事を頼んでこと切れる。菊池の『真珠夫人』では次の描写になる。

車体が急転したとき、信一郎と青年の運命も咄嗟に転換したのだつた。（略）青年はじつと眸を凝らすやうであつた。激しい苦痛の為に、ともすれば飛び散りさうになる意識を、懸命に取り蒐めようとするやうだつた。（中略）

「お願ひ！―お願ひ―お願ひです。返してください。返してください！」

もう、断末魔らしい苦悶の裡に、青年は此世に於ける、最後の力を振りしぼつて叫んだ[13]。

バルザックが1頁で書いたところを、菊池は10頁近くを費やして描写する。紙数の関係で余儀なく引用を省略して、両者の酷似を十分に示せないのは遺憾だが、バルザック『ことづて』での馬車の転覆が、そのまま『真珠夫人』の自動車事故となり、相乗りの青年が死に際して、人妻である恋人からの形見を知ったばかりの乗客に直接手渡すことを願うなど、菊池がバルザックの短編にアイデアを汲んでいることは明らかだ。

『ことづて』の日本最初の翻訳は、新聞連載の4年後の水野亮訳『バルザック小説集』。したがって彼に邦訳は読めないが、当時の作家たちはむしろ英訳で創作の栄養を得ており、京大の図書館には1918年前後にバルザックの英訳が沢山入っているし、国会図書館にもバルザックの英訳本がある。その蔵書に1901年刊のG.センツベリ編のバルザック著作集第5巻に『ことづて』が収められている[14]。

菊池が高松から上京して上野の図書館で本を読めることをどれほど喜んだか、開館と同時に閉館まで熱心に通って、下足番の小遣いさんの顔までも鮮明に覚えていた話は自身の書くところだ。さらに京大在学中にもバルザックの英訳本を読んだに違いない。そして菊池は、バルザックの良く知られた長編小説ではなく、人の注目しない短編を（長さの点でも読書には最適だ）よく読んでいて、いつか

12）Balzac, *Le Message* in *La Comédie humaine*, tome 2, éd. Pléiade, 1976, pp.196-198.
13）菊池寛『真珠夫人』、改造社版日本文学全集『菊池寛集』、1927年刊、144頁～147頁。
14）*A daughter of Eve; A woman of thirty, and other stories*, with introduction by George Saintsbury（The Works of Honoré de Balzac 5）, Philadelphia University ed. 1901.

小説の材料にしようとノートを取っていたのではないか。

『ことづて』では、事故死した青年の愛人の屋敷を語り手が訪ねると、夫人は夫の傍らで、意外に落ち着いて恋人の死を聞く。ところが夕食時、彼女の姿が消え、探すと暗い納屋の中で泣いていた。小説は、その翌朝ことづてを伝えた語り手がパリに帰るところで終わるが、そこに菊池寛の生涯のテーマ、「恩」の授受、「信義」の行使に共通するものが見て取れよう。翌朝夫人の家を立ち去る語り手に、夫人はそっと旅賃を渡す。あるいは恩を施しながら優しい心遣いを忘れなかった成瀬夫人を、その人妻の配慮から想起したかもしれない。その上で菊池寛は、「そのドラマの後、どんな展開になるか」と想像を逞しくしたに違いない。

語り手が夫と一緒に夫人の姿を探して、悲嘆にくれる彼女を納屋で見つけた時、「ご主人に見られてますよ」と注意した語り手に、夫人は「私に夫があったでしょうか？」と言い放つ。毅然として品位に満ちた彼女の一言が、世上噂の高い白蓮夫人のイメージと重なり、『真珠夫人』の処女妻瑠璃子に発展したのではないか。菊池寛はまさしくそうした想像力と洞察力、そして才気を持ち合わせている作家だった。知性と美貌、さらには家柄を前面に出して、金力と地位に得意げな男たちを手玉に取るヒロインは、当時きわめて魅力的だったはずだ。おそらく多少の反発も計算しながら、菊池は瑠璃子像を描いていったに違いない。

5. フランス小説の影

『真珠夫人』におけるフランス文学の借用はそればかりではない。形見の時計を瑠璃子に返しに行った信一郎は彼女のサロンに招じ入れられ、サロンに集う青年たちと純文学と通俗小説について議論を戦わす。瑠璃子は信一郎に多くのフランス作家の名前を挙げ、とりわけメリメを評価する。

「一等好きなのは、メリメですわ。それからアナトール・フランス、オクターヴ・ミルボーなども嫌ひではありませんわ。」

「メリメはどんなものがお好きです。」

「みんないいじやありませんか。カルメンなんか、日本では通俗な名前になつてしまひましたが、原作は本当にいいじやありませんか。」[15]

メリメといい、アナトール・フランスといい、ここで名の挙がるフランス作家に強い関心を抱く芥川龍之介を髣髴とさせる秋山正雄なる作家を登場させることで、親友に目くばせして見せたのだろうが、菊池寛自身がメリメを高く評価していたこともまた示している[16]。『真珠夫人』という、当時としてきわめてハイカラなタイトルは、メリメの好短編『トレドの真珠』（1829年）から思いついたのではなかろうか。わずか100行ほどで、「トレドの真珠」と呼ばれる美女をめぐって、サラセンの青年騎士とスペインの伯爵との間で決闘が行われ、敗れたサラセンの騎士に驕慢の姿で近づく「真珠」に、騎士は最後の力を振り絞って女の顔に切り

15）菊池寛『真珠夫人』、前掲書、259頁。

16）小林幹也「誰の視点で眺めるか―『真珠夫人』の視点人物―」（近畿大学文芸学部論集、第18巻第二号、2007年3月）において、小林は菊池の語りの視点転換がメリメの『カルメン』に則ったものとしている。

傷をつけて物語が終わる。小説の最後に青年青木の刃を受けて倒れる「真珠夫人」瑠璃子のイメージは、このメリメの傑作から思いつかれたものかも知れない。[17]

興味深いのは、メリメ礼讃の瑠璃子の言葉に続けて記される信一郎の感慨だ。

信一郎は生まれて初めて男性と対等に、話し得る立派な女性に会つたやうに思つた。（略）彼は今瑠璃子夫人と会つて話していると、日本にも初めて新しい、趣味の上から云つても、思想の上から云つても、優に男性と対抗しうるやうな女性の存在し始めたことを知つたのである[18]。

7年の後、芥川の絶筆『或阿呆の一生』（1927年）に「彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」[19]とある有名な一句は、この『真珠夫人』の一節が芥川の頭にあって、出て来た言葉ではなかったか。それほどに男性と対抗しうる女性の存在としての瑠璃子の造形には先見性があり、その先見性、時事性こそ、菊池を「成功」に導く有力な鍵の一つだった。

しかし『真珠夫人』が売れ過ぎ、また瑠璃子的な女性像が、一般の反発をもたらしたこともあって、以後、瑠璃子的な女性はむしろ敵役になり、昔ながらの貞淑で温純な女性がヒロインとして登場することが多くなる。

たとえば『陸の人魚』（1925年、『東京日日新聞』連載）では、もともとは裕福だった父親が政治に力を入れ過ぎて財産を無くし、今は三井物産の重役である叔父の金銭的世話を受けるヒロイン麗子は、美貌ながら大人しく、従妹（いとこ）の敏子はわがまま放題に育って、思うさま云い募る。結婚の相手も敏子は高望みで、今しもわがまま娘敏子を書斎に呼んだ会社重役の父親を閉口させる。

「今度の話の口は、華族なんだがねえ。」

「男爵？」

「もつと上だ。」

「子爵？」

「もつと上だ。」

「子爵の上、ぢや五尺？」

「ふざけちゃいけない。一生の大事を定めることなんだから、もっと真面目にきかなけりや。」

父はさういつて、この駄々児を、いましめた。（略）

「だつて家柄なんか悪くつてもいいから、もっと有名な華族様がいいわ。」（略）

「なあんだ。お前のわが儘にも、あきれるね。此間は、華族がいいといつて置きながら、今日はまたこの頃の流行思想にかぶれたことをいふんだね。」[20]

この敏子と父親の会話は、そのままバルザックの中編『ソーの舞踏会』*Le Bal de Sceaux*（1829年）で、父フォンテーヌ伯爵の勧める縁談に耳をかさぬ娘エミリーとの、以下の会話をそのまま聞くようだ。

17）メリメ『トレドの真珠』については、拙稿「プロスペル・メリメ『トレドの真珠』を＜読む＞」、『文学』2003年11-12月号、岩波書店、2003.11参照。

18）菊池寛『真珠夫人』、改造社版日本文学全集『菊池寛集』、1927年、260頁。

19）『芥川龍之介全集』第9巻、岩波書店、1978年、329頁

20）菊池寛『陸の人魚』、平凡社版『菊池寛全集』第9巻、1929年、181頁～185頁、

「ねぇ、お前。」とフォンテーヌ卿は深刻な声音で言った。「お前に来てもらったのは、真面目にお前と話をしたかったからだよ。お前の将来についてね。(略)、つまり結婚する相手を選んで、長く幸福になるように、だね・・・」

「まぁ、お父様」とエミリーがこれ以上ない優しい声音を使いながら、その言葉をさえぎった。「私たちが結婚相手に関して交わした休戦条約は、まだ期限切れにはなっていないと思うのですけれど。」

「エミリー、こんなに大事なことを冗談扱いするのは、今日はやめないか。

(略)

「いったい何が望みなんだ？」

「フランス貴族院議員の息子。」

「いや、まさしく馬鹿娘だな！」こう言ってフォンテーヌ卿は腰を上げた[21)]。

これもまた紙数の関係で、その酷似ぶりを逐語的に追うことができず遺憾だが、会話全体のやり取りは、『真珠夫人』と『ことづて』の場合と同様、酷似する。中村真一郎の初訳は17年。これも1901年に出た同じバルザック英訳のシリーズにある。その The Balat Sceaux を菊池寛は読んだに違いない。

菊池寛が英米の作家から小説執筆のヒントを得ていたことは、他の同時代の作家とそれほど変わらないが[22)]、あまり人の知らない無名の作家より、バルザックなどの大作家の、人知れぬ短編を巧みに取り入れるところに、小説家としての才気がはじける[23)]。おそらく最新の『菊池寛全集』全24巻（高松市菊池寛記念会編）を精読すれば、上にあげた以外のどの作品が、バルザックあるいは他の英米仏作家からヒントを得ているかを探ることができようが、しかしそのことは決して作家菊池寛を貶めることにはならない。むしろ彼の膨大な読書力と、そこから拾い上げる材料から物語を膨らませて、新しい世界を創造する才気をこそ評価すべきで、その才気とエネルギーがあればこそ、企業家としての成功もあり、菊池寛の大をなす所以もある。

菊池寛における長短編小説の材源の探索は、菊池のみならず、彼を取り巻いていた多くの若手作家、川端康成や横光利一などの創作の秘密にも分け入らせるのではないか。英米作家に多く探索の目を向けられてきた菊池寛の読書に、バルザックやメリメなど、フランス19世紀の作家もまた大きな位置を占めていたことが明らかになり、処女長編『真珠夫人』の小説的意義を新しく付け加えることができれば、小論の意図は達せられる。

（大手前大学学長、大阪大学名誉教授）

21）Balzac, *Le Bal de Sceaux* in *La Comédie humaine*, tome 1, éd.Pléiade, 1976, pp.126-128.

22）日本近代文学と欧文学との影響関係については柏木隆雄『交差するまなざし―近代日本文学とフランス―』、朝日出版社、2008年刊参照。

23）単に欧米の小説だけでない。『不壊の白珠』（1929年、大阪、東京『朝日新聞』）は、美人で昔風のしとやかで慎ましやかな姉敏枝と、積極的で男性に対して物おじせず、むしろ媚びを売るように接する妹玲子の姉妹の物語で、男性との応対は不器用で礼儀正しく、きちんとしている姉は、「不壊の白珠」として純潔を保たざるを得ない状況で終わる。これは新約聖書にあるマリアとマルタの話（ルカ伝10章38以下）の逸話から触発されたのではないか。1942年の太宰治『律子と貞子』の趣向にも取り入れられている。太宰が『不壊の白珠』を読んだかどうかはともかく、名作から新しい趣向を生むのは二人に共通している。